クロポトキン『フランス革命史』による問題提起的アンケート

I

姫路の集まり（本稿末尾の〈註〉参照）に現われた代表的な二つの意見のうち、第一に以下のことについて論じてもらいたい。

(A) 山口君の意見の背景ともなっている―革命は、それが流した血の代償たりえない、ということ。その代表的なものはプルードン、ランダウァ、M・ブーバ、及びS・ウェーユの思想に表われている。

即ち、御存知のようにプルードンは死ぬ二年前悲痛にもフランス革命に対し「我々に中央集権をもたらしたのは革命の闘争だ」と嘆いており、ブーバーは自分は「バクーニン的処女受胎を信じない」という。S・ウェーユは頽廃したルイ王制からブルジョワジイの議会主議中央集権確立への変革には、決して権力の「連続性の断絶はない」といい、またロシア革命

に対してもその真にリアルな本質はツアーの専制的な警察、軍隊、官僚組織が、革命によって粉砕されるどころか、革命のおかげで他の諸国に比類のないほど完璧な仕上げを見た、とはっきり断言している。

かくて、ランダウァやブーバーのように国家そのものを実体としてでなく、関係と見る人達は、現存国家を社会共同体関係の連合という新しい関係へ漸次的に移行代置することによって、国家権力を絶無にする構造変革の方式を求むる線に至る。この線と、

Ⓑ 即ち、クロポトキン、高島君や貫名君の線ー最終的には勿論、権力なき社会共同体の連合を意図しながらも、漸次的ではなく、徹底的な変革によって同時に、その変革の中に、我々アナキストが希求する進歩をみようとする立場（ぼくの理解に誤りがあったらご免なさい）ー即ち、クロが「フランス革命史」の中で立っている立場の是非を問題にとりあげてもらいたい。

Ⓒ Ⓑの立場、クロや高島、貫名君の思想の背景に十九世紀の機械論的唯物論がもたらした因果論的決定論（ぼくは決してこれをなめていません）があり、これは高島、貫名君の場合ー革命をあらかじめ物理的量の問題として計量しうる、という形で表われていると思うが、このぼくの考えは間違いかどうか御批判が願いたい。

Ⓓ クロポトキンの中には、一方、実に強烈な理想主義的な熱情が波打っていて、方法論的にはⒸの機械論的唯物論の上に立ちながら、本質論（存在論の意味）的には、革命の原動

力を民衆の正義の本能の中に求める傾向が強いことは誰しも認める処です。しかも、帰納的にこの後者の原動力に重点を附し、Ⓒの方法論的部分は、この原動力の単なる附帯的なまたは、従属的なものとしてしかみていないような印象をうけるが、この見解は誤りかどうかを検討してもらいたい。

このⒹから、ぼくはⒸで取り扱った問題のとり扱い方の中へ、以下のような問題が派生してくるように思う。それは、TさんやNさんを、ぼくは機械論唯物論者の範ちゅうに勝手に入れたが、或いは両君は、Ⓓで述べた「方法論」と「本質論」を唯物弁証法的にというのは、革命を「方法」として捕えるのみならず、同時性的に「存在」として統一的に捕えんとする立場に立っていられるかも知れないからですが、ここではマルクス主義者たちにありがちな、つまらない抽象的な理論遊戯に入いりこまないことにしたい。

Ⓔ さすがに、レーニンはこの純粋理論遊戯の問題は避けて、クロの「フランス革命史」を「フランス革命について書かれた最良の歴史だ」と、ポンチ・アルウェウイチに語ったと伝えられている通り、革命の原動力となったフランスの労働者及び農民諸君の願望と否定の闘争とを、革命的な当時のブルジョワジイの革命綱領と対比されて、実にリアルに、熱烈に書いている点において、J・ジョレスの革命史などより、遙かに優っていると思う。

まず第一に、革命前のフランスブルジョワジィは北アメリカの独立に鼓舞され、次いで一四〇年前に英国に到来した如く、フランスでもルイ十六世の手から脱落しかかっている政治

権力が自分達の方へ来るべき時期が到来しつつあり、そして、そのために先ず、何をなすべきかを知り初めていた。

思想的には彼らは、十八世紀の哲学からその理想を汲みとっていた。この哲学の比類のない科学的（決定論因果論）精神、因習道徳に対する侮蔑にもかかわらず、その極めて道徳的な性格、相互に平等な同胞と共に共同生活を営む自由人の理性、力、偉大さに対する無限の信頼、専制政治に対する憎悪ーこれら一切が当時の革命家達によって承認されていた。

一七八九年に近づくに従って、ブルジョワジィ革命家たちの中にー自分達を富ませるための綱領の実現のために活動していた者の中にー「個人の致富こそ、全体としての国民の致富の最良の手段だ」と、真面目に信じている者が多くなって来た。実際、アダム・スミスやティルゴーなどの経済学者達は、かたくこれを信じて疑わなかったのです。

一七八九年のブル達にとって自由、平等（法律の上の）、政治的宗教的自由の思想が綱領の形をとるや否や、それは自然資源を個人的致富に利用する自由、一方において、国家の煩瑣で圧制的な圧力から産業を解放して、労働者を搾取する完全な自由、製造業者の妨害によるような一切の、国内関税、禁止法の撤廃、一口に云えば、企業の営業に対する完全な自由、労働者の団結への厳重な禁止要求となって表われた。ブルジョワジイはまた、農民と農村に縛りつけている桎梏か、まず断ち切られねばならないことを知っていた。農民が郷土を立ち去る自由を持つこと、時によっては、職を求めて都市に移住することを余儀なくさせるよう、

農民に強制することさえ考えた。これは、今まで領主に農民が支払っていたあらゆる種類の貢納の代りに、産業家のために金の玉子を生むめんどりになることを強要したと同じです。

要するにブルジョワジーは、最後において、国家財政に新しい秩序を与え、支払い易く、しかも収入の最も大きな租税制度を確立することを望んでいた。

(F) 政治的には、封建的な王政権力を中央集権的な自分たちの新しい議会主義的権力に置きかえようと、ブルジョアジーは全ゆる努力を続けたが、その努力も、伝統的に残存していたルイ王朝の権力に押されて、徒労に終った。

社会主義とか民主主義とか云う言葉は当時はなかった。が資本の主要形態、人間労働搾取の主要手段として、土地で工業の発展が殆んどみられなかった当時において、哲学者の思想、又は革命家の思想が、まず土地の共同所有ということに向けられたのは当然である。従ってルソーなどよりずっと革命的であったマグリーは、土地に対する万人の平等と、共産主義的土地所有を主張した。これが革命前の著述家及び変動時代の左翼革命大衆の中心思想です。

しかし、不幸にしてこの共産主義的願望は、当時の民衆の幸福を希望した人々の心の中で、明瞭な具体的な形を取っては与えられなかった。クロは断言している。「教養のあるブルジョワジイの間では、解放思想が政治的経済的組織に対する完全な『綱領』の形をとったのに反し」、「民衆に対しては、解放思想は漠然たる『願望』の形で提示されたにすぎない。多くの場合、それは単なる『否定』にすぎなかった」と。

このことから、まず第一に、以下のことを検討してほしい。

(1) 漠然たる願望の形で提示されたが、これは当時のフランスの労働者、農民が常日頃から感じ、そして身にしみて保っている深い内心の希求と、完全にマッチしていた。それは直接的に否定の形で、当時のフランスの領主や坊主などの貪欲に対する身をもってする闘争という形で、革命の原動となり、ブルジョワ革命家の綱領の実現を可能にした唯一のものだという意見について検討して下さい。

(2) それから、最も中心的に論じてもらいたいのは、前述の労働者及び農民諸君の『願望』と『全的否定』の精神や、それから発した激烈な闘争が、ブルジョワジィの綱領を遥かに越えて―真の分権主義的な共産主義の形を取ったことは、来月お送りする原稿で詳しく述べますが、関西の意見をまとめて下さい。

Ⅱ

前項（F）で述べたクロの見解―即ち、フランス労働者及び農民諸君の解放思想に対する熱情が、王や坊主や貴族どもの「全的否定」と、強烈な階級的な「願望」となった。そして、一七八九年四月の特に烈しいフランス東部及び南部全地方の都市や村々で行われた反逆運動

から、七月のバスチーユ襲撃に至る―その発展の真の動機を、彼が「フランス民衆の共同体感情」の爆発だと見ているのは、全く正しくそのものずばりだといっても良いと思う。

勿論、七九年代の専制的王権の執拗さに業を煮やしたブルジョワ革命家や、議会権力の確立に反対する反動的な貴族どもは、それぞれの立場から、貧民をアジった。例えば、後者は主として村々で、貴族にかぶれた新興地主とぐるになって、貧民達をブルジョワジィに対する反抗に駆り立てようと試みたが、共同体感情に燃えている民衆の波に対して、こうした貴族どもの「最後のあがき」は無駄であった。一方ブルジョワジィも、場末街の貧民窟に、いわゆる「ごろつきの援兵」を求めた。だが、このごろつき達が自分達の個人的憎悪を満足させ、また、その窮乏を緩和するためにやった掠奪は、極めて稀であったという有力な沢山の証拠を、クロポトキンは細かに明記している。例えば、多くの僧院が襲われた。ある僧院では「五十二の手車に積み込まれた小麦粉は直ちに誰の口にも入いる様に、市庁へ運ばれた」クレーブ広場でランベスク公の馬車を焼き払った時も、その中にあった一切の物は市庁へ送り返した。短刀、大鎌、棍棒で武装した農民が群をなして都市になだれ込み、「穀物を市場に運んできた農場経営者を強要し、これを一定の正直な値段で売らせたり」、小麦商人のところへ押しかけて次の収獲の後で勘定すると云う約束で「割引値段でわけあったり」、また「領主を強要して数ヶ月間製粉機使用税を放棄させたり」、時には「個人の穀倉まで襲撃して、パン焼人に小麦粉を供給したり」、また「土地台帳を焼いたり」した。

パリでは武器商が襲われたが、民衆は金には目もくれず、弾薬と武器だけを奪って引きあげた。フランス南部の四十以上の町村では小麦税が廃止されて「群衆は、革税、屠殺税徴収官史の家を掠奪」した。食料品の価格は引き下げられ、その最高価格が一定された。ブルジョア紳士諸君がこれに抗議した時には、投石やその目の前で墓穴を掘って威嚇し、時には反対者を脅迫するために、棺桶さえ持ち出された。

かくして、フランスの貧しい労働者や飢えた農民大衆の、抑圧されていた止むに止まれない「願望」は、ついにブルジョア革命家たちの政治経済的な「綱領」を急速に超えていったのだ。

この「綱領の超越」は、彼らに固有な労働者農民「信仰」の血肉化であった。その内容はむしろ無償性を帯び、ただし全責任負担、全束縛脱出、ただし全反響という過程を同時性に通過して、既製の一切の原理を越えて、ー如何に微視的に見えようともー地方的におのずから横に拡大して行く斬新な組織創出の契機をなすものである。そして、歴史の危機にあたって、いつでもこの古くて新しい願望が、どの様に全反響を社会に与え、あらゆる抑圧や束縛を断ち切ったかをーこの基礎に美的な形而上学的な性格があるためにインテリどもは身に引き受けて認知することを、避けるような気がするが、ーこのことも一つ大いに関西で論じてもらいたいと思う。

なお、このクロポトキンの「綱領からの超越」は、今やストライキが雨夜の星となり、労

働組合そのものが存在しないと云っても良い（八幡製鉄の下請組合が完全な首切り機関となったこと等）日本的現状において、谷川雁がぶっている「戦闘的第二組合論」（読売新聞十月五日号）とも深い関係があると僕には思える。

この、諸君になじみの薄い組合論は、組合の全国組織だの何々主義の正統派などを奉っている連中からは、すでに「政治思想上」はっきりと「断罪された統一団結論理の破滅」を意図したものと断定され、疎外されているものです。姫路の会議の時、たしか藤本さんが「大正行動隊なんてだめだ」と云われたのは、この線上からの発言ではないかと思います。だが、谷川雁の「断罪された」統一の団結の破壊は、論理の上の遊技ではなくて、単なる実際の大衆運動の次元へ降りて来た、大正行動隊の退職同盟と云う戦闘的第一組合のことなんです。

それは「これまでやる気のある労働者が、何度も夢みて抑圧されて来た悲願の対象化であって、その衝動に、ともかくも出口が与えられたということは、労働運動の範ちゅうを越えて、全思想領域にまで震動を及ぼさずには止まないと云う事実」「何人もまだその思想的判決をこのような組織形態の必然性の形へみちびくことにためらっているとき、事実は大衆の手で萌芽的に顕現せしめられ、それは早くも合化労連、炭労という二大産別の統制主義を自壊させるほどの意味を示している。」

傍点は筆者のものですが、そこを多少でも注意して読まれた人は、「何人もまだその思想的判決をこのような組織形態の必然性の形へみちびくことをためらって」いるどころか、す

でに一七八九年のフランスの労働者や農民諸君が身をもって範例を示し、クロポトキンが定式化した「綱領の超越」と「原理の超越」とが、如何に似かよっているかがお分りのことだと思います。

なお蛇足ですが、彼は続けて「戦闘的第二組合は、南九州と北九州の微視的な二地点で、ついに原理の越境を敢行したのである」と断言し、続いて彼は、「保証つきで云うが、現在の政治的前衛どもは、あらん限りの手練手管を労して、戦闘的第二組合を白でもなく黒でもなく、灰色だと云うにきまっている。おそらく知識人もチャコール・グレーだか、ロマンス・グレーだかの頭布をかぶって渋好みを自称するだろう」といい、続いて戦闘的第二組合の本質とは「原理Aが、原理Bにとって代るところにはない。それは第二、第三、第四……第N組合と続く無限の分裂を日常事として予定し、この越境の原理で原理一般を越境していくところにある」と大見栄を切っているが、これには一本筋が通っているのは、以下の彼の言葉からも分ります。「三池で鉱山占拠を主張した学生たちがいた。彼らはただ主張するにとどまった。越境すれば少なからぬ労働者部分を動かすことの出来る状況で、自ら越境する一人の学生もいなかった。彼らはあえなく袋だたきにされたかもしれない。その可能性もあった。だからこそ、そこでなぜ俺がやれなかったかと云う問い、大正行動隊の発生地点となった。越境の主張と越境そのものとの差は無限だという認識から、そこから先が戦術領域であるのに、凡百の戦術はそこで終ってしまう。」

ぼくは、来月のアンケートで、フランスの貧しい餓えた労働者や農民諸君が、議会の原理をどんどん越えて、自ら自発点に作りあげていった各地方や各地区のセクションやディストリクトの活動を委しく述べ、「綱領の超越」と「原理の越境」との密接な相似性を実証すると同時に、それがアナキズム固有な、いや、真の人間活動に固有なものであり、又、彼らの一切の闘争が極限状況において、そうする他には何とも仕様がない必至の事態を媒介としたもので、前述の学生やインテリ達のように、習い覚えた定石からの推論ではないことを、改めて再検討するつもりです。関西でも何卒、この問題をとくと話し合って頂きたい。

（一九六二年、六三年）

註記

一九六二年八月の大会を前にして、関西地協は、F君からの次のような手紙と脱退通告を受け取った。

『アナキズムは、革命を真に指向するものとは云えない。なぜなら、現実に有効な手段を何一つ提示しないから。アナキズムは排他的で、独善的で、独りで酔っぱらってしまうようにさせるものを、人にうえつける。それは、科学的に現実の問題処理を考えさせるより、面倒くさい問題から目をそむけさせ、無関心にさせ、無責任にさせる。

連盟員や連盟そのものが不活発であるのは、人そのものより、思想そのものに真因がある。アナキズムは、個人の自由、自立を守るに専念するあまり、個人と個人との結びつきによって生ずる個人以上の力を見ない。また軽視する。従って、団結、組織、階級という問題を、非常に簡単にあしらいすぎる。個人のヒューマニズム、善意、革命的精神、エネルギーは、それが一個のものとしてはどんなにすばらしいものであれ、現代資本主義的生産と、政治支配が君臨する社会では無である。アナキズムが革命的イデオロギーであるとするならば、当然、明確な方法論が出てこなければならない。革命はどうしてやるのか。他のあやまちを指摘するだけのものは、何もする能力がないと云える。』

これを契機に、アナキズム革命の可能性、現代とのつながりについての論議が行われ、九月一日、関西地協拡大例会が、名古屋、岡山、三原の同志を加えて、姫路で行われた。この席上、小川氏は、F君の問題提起を積極的に受け止め、家族、性の思想の関係を更に深く掘り下げつつ、解答を出してゆかねばならない、と述べ、自分は、クロの『フランス革命史』の問題点を要約し、皆にアンケートすることで答えたい、と語った。その発言にもとづいて連盟ニュース及び謄写印刷で、二回にわけて各人に送られたものが本稿である。